

進化宣言!
電撃文庫
FIGHTING
フェア

電撃文庫の大人気作品
『エロマンガ先生』の
書き下ろし短編小説

原作コンビとコミカライズ作者
がコラボレーション!

伏見つかさ

扉イラスト ◆ かんざきひろ
挿絵イラスト ◆ rin

3号連続掲載第1弾!

紗霧編

エロマンガ大王

EROMANGA-SENSEI

四月——「開かずの間」の扉が開き、俺が妹と一年ぶりの再会を果たしたあの日から、数ヶ月の時が経った。
いまは九月。最近の俺たち、和泉兄妹について、話そうと思う。
まずは自己紹介から。

俺は、和泉正宗。高校一年生。
「和泉マサムネ」というペンネームで、ライトノベル作家をやっている。

そして、俺の妹、和泉紗霧。
中学一年生——十二歳。

銀髪碧眼の幼い容貌。
重度の引きこもりで、実は、俺の小説に挿絵を描いてくれているイラストレーターでもある。

ペンネームは、エロマンガ先生。
——とまあ、紹介はこの辺にして、さっそく本題に入ろうか。

とある休日の午後。俺は妹の部屋——通称「開かずの間」の中で、妹と向かい合って座っていた。俺は、片手で己の顔を押しさえした「懊悩のポーズ」で、

「困った。ああ、困った。困ったぞお〜」
「……………兄さん、その、わざとらしいフリはなに？」

バジヤマ姿の紗霧が、醒めた眼差しを俺に向けて。
ヘッドセットを付けて拡声し、かろうじて聞こえる程度の小声だ。

「……………私に……………相談があるんじゃない？」
「……………なかつたの？」

「そうなのだ。めったに部屋に入れてくれない妹に、俺は「仕事の相談」を持ち掛け——なんとかこうして「開かずの間」に入れてもらったというわけだ。」

小説家である俺の仕事は、紗霧——エロマンガ先生の仕事と、密接に関係しているのだから、いくら兄貴に冷たい紗霧といえど、この要件に關してのみは、俺をむげにすることはできない。話くらいは聞いてくれる。

「……………相談。俺、エロマンガ先生に、大事な相談があるんだよ」

「そ、そんな名前のひとは知らないっ」
「かあつと赤面して、紗霧はいつもの台詞を口にする。」

「……………だから、そんなに恥ずかしいなら、なんでそのペンネームにしたんだよ。」

「……………もしもこれが小説だったなら、エロマンガ先生というペンネームの謎は、作中最大のミス터리になるどころだろう。」

「……………そ、相談ってなにっ？ 早くゆってっ」

「……………ああ、実は——」
俺は、真剣な口調で言った。

「……………頭をなでさせてくれ」

「……………きよとん、と、目を丸くする紗霧。」

「……………わ、私の頭……………って……………そ、それが、大事な相談っ？」

「……………うん」
「……………うう……………なんで……………そうなるの……………」

紗霧は、困惑の色を顔に浮かべ、頬を桜色に染めている。

「……………俺、最近、ラブコメ小説を書いているだろ？」

「……………うん」
「……………いままで、ずーっとバトル小説ばかり書いてたから、まだラブコメに慣れてなくてさ。面白いシーンのアイデアが、なかなか思い浮かばないんだ」

「……………それ……………たしかに……………深刻な問題かも」
「……………だろ？」

「……………だから、ちょっと頭をなでさせてくれよ」
「……………だから……………ってっ。な、なんでそうなのっちゃうのっ？ 意味わかんないっ」

説明が足りなかったらしい。
「……………わ、わわわ、わたしの頭をなでると……………アイデアが思い浮かぶの？」

「……………たぶん。この前は、それで、すごいひらめいたし」

「……………紗霧は、頭をぎゅーっと押さえて恥じらっている。」
「……………なんっ？」

「……………ラブコメってのは、かわいい女の子を描写しなくちゃいけないんだ。かわいい女の子の、かわいい仕草だったり、かわいい表情だったりな」

「……………でも、なんで私が……………」
「……………この前、おまえも言ってたろ？ イラストを描くときは——」

生で見たことないものは、描きたくない。

「……………——ってさ。小説家も同じだよ。ちゃんとこの目で見て、取材したものが、うまく書けるに決まってる。だから——超かわいい妹の、かわいいところが見たいんだ」

「……………な……………っ……………」

紗霧は、かあ……………と……………と耳先まで真っ赤になり、

「……………に——」
「……………ばんっ、と、勢いよく立ち上がった。」

「……………に、兄さんのえっち！」
「……………えっ……………な、なにが!？」

「……………すげべっ！ へんたいっ！ な、なんでっ、堂々と……………そゆこと……………っ！」

紗霧は、ぎゅーっと両拳を握りしめ、泣きそうなの目で見ている。

俺は、慌てて反論する。
「……………ちよ、ちよちよ、待ってくれ！ そこまで言われるほどのことか!? かわいい妹の姿が見たいって言っただけじゃん！」

「……………なんでそんな、痴漢におしり触られたみたいになりアクションすんだよ!？」
「……………おかげさすぎるだろ!？」

登場人物紹介

和泉正宗
Masamune Izumi

高校に通いながら小説家の仕事をしている。ペンネームは和泉マサムネ。自分の作品やペンネーム、WEB検索できないタイプ。引きこもりの妹がいる。

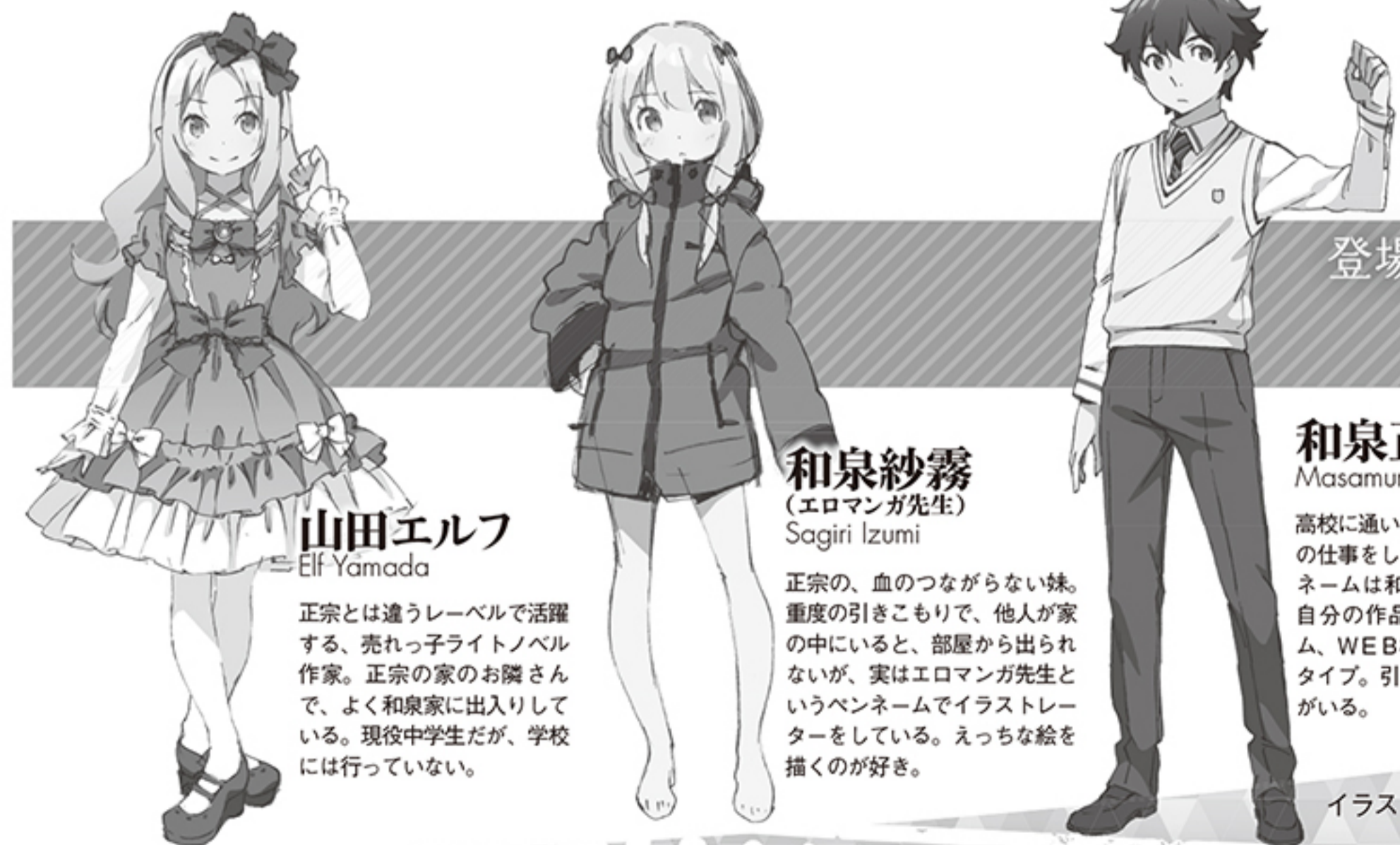
イラスト・かんざきひろ

和泉紗霧
(エロマンガ先生)
Sagiri Izumi

正宗の、血のつながらない妹。重度の引きこもりで、他人が家の中にいると、部屋から出られないが、実はエロマンガ先生というペンネームでイラストレーターをしている。えっちな絵を描くのが好き。

山田エルフ
Elf Yamada

正宗とは違うレーベルで活躍する、売れっ子ライトノベル作家。正宗の家のお隣さんで、よく和泉家に入出入りしている。現役中学生だが、学校には行っていない。



EROMANGA-SENSEI

EROMANGA-SENSEI

るだろーが。

「……えっちつて言うやつが、えっちなんだよ」
ぼそつ。俺は、そっぽを向いて呟いた。

「……は？ はあ？ 兄さん……い、いま……
なんてゆったの？」

「紗霧のえっち」

「！」

「エロマンガ先生のすけべつ、へんたいっ」

本人の口真似で言ってるやると、妹は目を見開いて絶句した。

「な……な……な……な……な……な……」

辛うじて動揺から立ち直り、ばちばちとまばたきをひとつ。

「私っ、えっちつじゃないもんっ!？」

きい——ん。

マイクを付けて大声を出したのだから、スピーカーからとんでもない大音量が発生した。

俺も、どころか紗霧まで、耳を押さえてしばし苦しんだ。

やがて、ようやくダメージが抜けたころ、紗霧が息を荒げながらも、先の台詞の続きを口にする。

「わ、わたしが……えっち……つて……ど、どこがっ？」

「『エロマンガ先生』とかいうペンネーム」

俺は、きわめて端的に、妹の急所を突いた。

「くうっ——」

紗霧は両目をきつくつむって、

「べ、ペンネームはノーカンだから」

「そんなのありかよ」

「ありなのっ！ 私のことをペンネームで決めつけるのはだめっ！」

「別にペンネームだけで、えっちと決めつけているわけじゃないぞ。他にも理由はある」

「ふ、ふうん……たとえば？」

「たとえば、女の子に、絵のモデルになってもらっているときの態度とか」

「……お、覚えてないなあ」

うそつけ。口調まで変わって怪しいんだよ。

「政治家みたいな言い訳はやめろ。覚えているだろう？ おまえが女の子たちに行った、数々のえろ行為を！」

お隣に住む美少女に、スカートをたくしあげろって命令したり——

クラスメイトの女子の、ばんつを思いっきりずり降ろしたり——

他にも無数の余罪が、こいつにはあるのだ。

顔に指を突きつけてやると、紗霧は、ぶいっ

とそっぽを向いて、唇を尖らせる。

「しらない。そんなひとはしらない」

すつとほけやがって！

「おまえの描いた絵」という形で、動かぬ証

拠が残っているんだが？」

「え、えと……あ、あれは、空想で描いたものだからっ。しょうこふじゅうぶんっ」

「……俺自身が目撃しているんだぞ？」

「もおお——その話は終わりっ！ 終わりったら終わりっ！」

紗霧は、ごまかすように（マイクで）大声を出し、強引に話を最初まで戻す。

「とにかくっ！ 私の頭をなでるのはだめっ！ 絶対だめっ！ 理由は兄さんがえっちなだけだからっ！ はいっ、相談終了っ！ 出ていってっ！ いますぐここから出て行ってっ！」

俺は、真っ赤になった妹に背を押され、部屋から追い出されてしまったのであった。

「くそう……俺は、純粹に仕事の相談をしていたのに……あんな、兄貴にセクハラされたみたいなリアクションをすることないじゃん」

俺は、とほとほと階段を下りていく。

「しかし……どうすっかな」

俺は、いま、ラブコメが書けなくて困っているのだ。書き慣れているバトルものなら、いくらでもアイデアが湧いてくるのに、執筆ジャンルを変えただけで、こども苦戦するとはな。

妹に相談して打開しようと思ったのに、それはうまくいかなかった。

いや、まあ、かわいく赤面している姿は見られたのだが——その理由が「自分が女の子たちにしたえろ行為をごまかすため」だからなあ。

どうにも、小説のネタにするのは、気が咎めるといふか、萎えるといふか。

「………なんか、他の手立てを考えなければ……」

悩みながらも、俺の足はリビングへと向かっている。

そろそろ、妹のおやつを用意してあげなければならぬ。

我ながら、なんと献身的なお兄ちゃんだろう。報酬として、ちよつとくらい、頭をなでさせてくれたって、ばちは当たらないと思っただが。

きい、と、リビングのドアを開けたときだ。

「あら、マサムネ。勝手にお邪魔してるわよ」

リビングのソファに腰かけて、上品に紅茶を飲む金髪美少女の姿が、俺の目に飛び込んできた。

「お、おまえ……」

俺は、驚きのあまり絶句してしまふ。

ふりふりのロリータファッションを身にまとった彼女は、山田エルフという。

我が家のとなりに住む、なんと十四歳の、超売れっ子ライトノベル作家である。

エルフとかいうふざけた名前は、もちろん本名ではなく、ペンネームだ。

「勝手にお邪魔してるわよ」じゃねーよ。なにやってんだ、ひとんちで」

「見てのとおり、ティータイムを楽しんでいるの！ 仕事をサボってるね！」

「いや、そういうことじゃなくてだな。……はあ、もういいや」

エルフのまぶしい笑顔を見ているうちに、細

かいことはどうでもよくなってきた。

「マサムネ！ そんなところに突っ立ってないで、こっちにきて座りなさいよ！ ホラ、クッキーを焼いてきてあげたのよ！」

「ここは俺んちだっつーの」

「……どーも、こいつは、俺んちの一階を、自分の領土だと思ってるフシがあるんだよな。毎日毎日、完全に我が物顔で居座りやがって。」

得意げにクッキーの袋を掲げるエルフに向かって、俺はやれやれと言った。

「紗霧のぶんもあるんだろな？」

「もちろん。お互い様とはいえ、エロマンガ先生には、最近お世話になってるしね」

聞いてのとおり、エルフは「エロマンガ先生」の正体を知る、数少ない人物のひとりだ。

俺と同じラノベ作家で、俺たち兄妹と同年代で、紗霧と同じように学校に行っておらず、そしてなによりエロマンガ先生の大ファンで——。

そんな彼女を、正直なところ、俺はとても頼りにさせてもらっているのだった。

「つてわけで、うちの編集がエスケープ中のわたしを探しに来たら、「いない」って言っておいて頂戴」

まあ、ムチャクチャな性格をしているやつではあるんだけども。

俺は、彼女の対面のソファに腰かけて、

「……それはいいんだが。なあ、エルフ、おまえ、色々と締め切りやばいんじゃないっけ？」

「もおお——その話は終わりっ！ 終わりったら終わりっ！」

紗霧は、ごまかすように（マイクで）大声を出し、強引に話を最初まで戻す。

「とにかくっ！ 私の頭をなでるのはだめっ！ 絶対だめっ！ 理由は兄さんがえっちなだけだからっ！ はいっ、相談終了っ！ 出ていってっ！ いますぐここから出て行ってっ！」

俺は、真っ赤になった妹に背を押され、部屋から追い出されてしまったのであった。

「くそう……俺は、純粹に仕事の相談をしていたのに……あんな、兄貴にセクハラされたみたいなリアクションをすることないじゃん」

俺は、とほとほと階段を下りていく。

「しかし……どうすっかな」

俺は、いま、ラブコメが書けなくて困っているのだ。書き慣れているバトルものなら、いくらでもアイデアが湧いてくるのに、執筆ジャンルを変えただけで、こども苦戦するとはな。

妹に相談して打開しようと思ったのに、それはうまくいかなかった。

いや、まあ、かわいく赤面している姿は見られたのだが——その理由が「自分が女の子たちにしたえろ行為をごまかすため」だからなあ。

どうにも、小説のネタにするのは、気が咎めるといふか、萎えるといふか。

「………なんか、他の手立てを考えなければ……」

デビュー作がアニメ化決定したエルフ先生は、夏休み中、めちゃくちゃ忙しそうにしていたのであった。一緒に南の島に行ったときなど、担当編集同伴で、帰りの飛行機の中でまで（強制的に）仕事をやらされていた。……あれは無残だったな。

俺はこうならないよう、なるべく前倒して仕事をこなしていこうと誓ったものだ。

そんな超多忙な作家先生であるはずのエルフは、

「それね」

ひとんちのソファにふんぞり返ってこう言った。

「もうどうせ間に合わないから、諦めてゆっくり進めることにしたわ」

「諦めんよ！ 山田エルフ先生の新作を楽しみにしている読者に、申し訳ないと思わないの!？」

「だって無理なものは無理だもの。こんな過密スケジュールを組むやつが悪いのよ。くふっ、我が下僕たちよ……このままだと新刊延期しちゃうかもだけど、恨むんなら、わたしの担当編集を恨みなさい」

エルフは厳かな口調で、自分の大切な読者たちに、ありえないメッセージを送る。

「クッキー食べ終わったら、絶対仕事やらせるからな！ おまえのサボりを放置しておく、俺が罪悪感でつぶれてしまう！」

俺のせいで、新刊延期になったんじゃないか

EROMANGA-SENSEI

「……って、あとで悩むのはイヤだ。
隣に住む同業者の友人として、なんとか説得しなければ……！」

大いに焦る俺の前で、エルフは唇をかわいく尖らせる。
「ちょっと、マサムネ。せっかくだから二人っきりだつてのに、仕事の話はやめてくれる？」

「せっかくなにも、ここ数日のおまえ、うちに入りびたりじゃねーか」

正直、エルフと二人きりの時間が長すぎて、若干うざいくらいなんだが？

「わたしと仕事と、どっちが大事なの？」

「おまえの仕事の話をしてるんだ！」

「くふふ、わかっているわ。あんたって、常に本気でリアクションしてくれるから好きよ」

「くっ……」

ばかにされているようにしか聞こえん。

「……って、この女だけは……」

俺は、こほん咳払いをして、

「ま、まあ……なんだかんだ言っても、おまえはちゃんと締め切りに間に合わせてくれるとは思うけどな」

エルフは、意外そうに、両目をぱちくりとした。

「へえ、そりゃまた、信頼されたもんね。諦めた——って、本人が言ってるのに」

「だってさ、おまえって、一度も新刊を延期したことないじゃん」

「……」

目を見張ったエルフに、俺はこう続ける。

「おまえが本を出してる『フルドライブ文庫』って、よく新刊を延期しちゃうイメージがあるけど、そんな中、一番延期を連発しそうな言動の山田エルフ先生は、デビュー以来、きつちり三か月おきに新刊を出し続けているだろ？」

ピンとこない人が多いかもしれないが——実はこれって、とんでもないことなのだ。

執筆速度、売上実績、プロ意識。

そのうちどれが欠けても、新刊を定期刊行し続けることはできないのだから。

ちなみに俺・和泉マサムネは、これ、ちっともできていない。

あんまり売れてないからね。

「だから、今回も、おまえは読者を哀しませるようなことはしなないと思う」

「……あつそ」

「……あつそ、と、そっぽを向くエルフ。」

「……あつそ、と、そっぽを向くエルフ。」

その頬は、ほんのりと赤くなっていた。彼女は、再びこっちに向き直り、何かをこまかすかのように、早口で言う。

「そ、そういうあんたはどーなのよ？」

「俺？」

「そう。あんた、昨日『ラブコメ書くの難しいよ』、詰まっちゃって進まないよ——って、悩んでたじゃない」

「……その情けない口調は、もしや俺の真似か？……まあいいや。たしかに、詰まっちゃった」

「んっ」
「この前だって、兄妹でえつちな雰囲気出しちゃってさあ——わたしが途中で乱入しなかったら、どうなっていたことか」
「お、おまえ！ あれ、わざとだったのかよ！」
以前、紗霧の頭をなでさせてもらったときのことだ。

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」

「……ってか！ えええ、えつちな雰囲気って！」